

キューバの葉巻

浦野保範 フラメンコ・キューバ文化研究家

たばこは砂糖と共にキューバを代表する農産物の一つで、キューバ、ドミニカ、ホンジュラスが世界3大葉巻生産国として知られている。その中でもキューバ産葉巻の品質が最も優れていることは世界的に知れ渡っている。



1492年にクリストバル・コロン(コロンブス)が新大陸を発見した際、コロンの使者でスペイン特使のルイス・デ・トーレスがキューバ島に上陸し、先住民のタイノ族が、植物の葉を燃やした煙で体を焼きこんでいる情景を報告している。この植物こそがナス科・たばこ属の一年草の植物である「たばこ(Tabaco)」で、彼等はスペインにたばこ葉を持帰っている。また、1519年にエルナン・コルテスがメキシコに上陸した際、アステカ族がパイプで喫煙する習慣のあることを見ており、喫煙の風習はかなり古くから行われていたといえる。

キューバ西部のピナル・デル・リオ県はたばこ栽培に適した土壌と気候で、同県の大部分を占める **Vueltabajo** (ブエルトバホ) 地方で高品質のたばこ葉が栽培されている。その中でも **San Juan**(サンフアン)、**Martínez**(マルティネス)、**San Luis**(サンルイス)の三地域で最高品質のたばこが栽培されている。たばこ栽培には、湿度 79%、平均気温 25℃、適度な降雨、砂質で若干の酸性土壌が最も適している。同県以外のキューバ国内、また世界的に見ても多くの国でたばこは栽培されているが、ブエルトバホに軍配が上がる。同じ種を蒔いても土地によって収穫される品質に大きな差が出ることは周知の事実で、世界地図の中では極めて狭い土地で、世界に誇れる最高級の作物が栽培されていることは興味深い。



嗜好品である葉巻は、価格設定、味の表現方法、ビンテージ物が存在すること、オークションに出品されるなど、ワインと同類といえる。ワインが1本数百円台から百万円以上するものがあるように、キューバ産葉巻でも日本国内で1本3~4百円で買えるものから、1本数万円でオークションで落札されるものまである。2004年イギリスで行われたクリスティーズのオークションで25本入りボックスの **La Flor de Cano Short Churchills** が6000ポンド(約121万円)で、また1980年代の **Dunhill** は540ポンド(約109万円)で落札された。

現在日本で購入出来るキューバ産葉巻は20銘柄程度あり、その中でも **Cohiba**(コイーバ)

は値段も高いが、その高い品質で世界で最も人気のある銘柄の一つである。1959年のキューバ革命勝利前は、一説では500以上もの銘柄があったとのことだが、革命後、国が生産と販売を集約管理した際、銘柄も大幅に絞り込まれた。コイーバは1968年に生まれたキューバ革命後最初の銘柄で、1982年のスペイン・ワールド・カップまでは一般に販売されることがなく、キューバ政府の贈答用、またVIP向けや外国人向けの販売に限定されていた。



筆者は1980年9月に初めてキューバを訪問したが、前年の9月にハバナで第6回非同盟諸国首脳会議が開催されており、会場となったコンベンション・ホールの見学がセッティングされた。当時一般には販売されていなかったコイーバをコンベンション・ホールの売店で購入した覚えがある。これはキューバ儀典局差し回しの運転手が大の葉巻好きで、普通では絶対買えない凄い葉巻がある、というので、思わず買ってしまったのであった。かなり高価だったと記憶している。この時、生まれて初めて葉巻を



吸ったが、喫煙の習慣がない私にとって、吸った葉巻がコイーバでは猫に小判であった。何しろ味が分からなく、大枚支払ったものが煙になっていく、との思いしかなかった。実にもったいなく、葉巻が気の毒な位だったが、葉巻好から見れば贅沢この上ない経験だった。

コイーバの後継銘柄として **Trinidad**(トリニダ)がある。トリニダはコイーバが一般向けに販売された後、キューバ政府の贈答用として長年使われていた幻とも言える銘柄だったが、1998年からは一般向けに販売がされている。値段はコイーバと大差なく、サイズによって異なるが日本国内で1本2千円から5千円程度で購入することは出来る。葉巻は初心者向け、経験者向け等と分類されることがあり、味の表現も、軽い、甘い、マイルド、スパイシー等から香りが強く通向き、アフターディナー向け、エスプレッソコーヒーとの相性が良い等、千差万別である。



葉巻の保管は湿度約70%、気温約20℃、直射日光の当たらない、風通しの良い場所での保管が理想的で、一番の敵は乾燥。温湿度を一定に保つ葉巻専用の保管箱「ウミドール(Humidor)」に入れておくことが望ましい。大きさにもよるが、数千円程度のものから数十万円まである。吸い口をカットする専用カッター、専用マッチ、携帯用の2-3本用革ケース等、凝りだせば予算がいくらあっても追いつかない。

葉巻は確かに贅沢品といえよう。どんな時に葉巻を吸いたいのか？何人かのキューバ人に

聞いてみたことがある。共通する回答は「休みの日にゆっくりとシャワーを浴び、ソファに座って、コーヒーをゆっくりと飲みながら、時間を掛けて楽しみたい」というものだった。葉巻はゆったりとした時間を楽しむための良きパートナーとも言われている。

喫煙家にとっては肩身の狭い時代。葉巻となればなおさらで、紙巻たばこ(Cigarillo)の喫煙が許される場所でさえ敬遠され、シガーバーか自宅か屋外で楽しむ以外にない。筆者は現在、紙巻も葉巻も一切吸わないが、葉巻に関する歴史や銘柄、さらに葉巻に巻かれているリングに興味を持っている。リングは吸い口近くに巻かれている銘柄を印刷した紙製で、同じ銘柄でも何種類ものリングがある。日本では馴染み薄いですが、海外ではリング収集家もいるコレクターズ・アイテムになっている。

ハバナ巻(プーロ・アバーノス)は、代表的な銘柄だけでも 30 種類以上、現在、日本の葉巻専門店や規模の大きな煙草店で購入できるキューバ産の葉巻は、15 銘柄程ある。またインターネットの通信販売では 30 銘柄以上の中から、自宅に居ながらにして購入することもできる。

どの葉巻も、リングといわれる洒落たデザインの帯で巻かれていて、これだけを見ても、歴史と文化を感じる。収集愛好家がいるわけである。



同じ銘柄でも異なる形状とサイズがあり、ロメオ・イ・フリエタ (ロミオとジュリエット) は、種類の多さでも知られており 40 種類以上あるといわれている。名品コイーバも 20 種類以上が販売されている。

数あるアバーナの中でベストファイブを筆者の思いと、好みで選ぶと、以下の様になる。今は吸わないがコイーバ、ロメオ・イ・フリエタ、ダビドフが手元に残してあるので、再び味わう日が来るかもしれないと、入手時の思い出とともに大切に取ってある。

それぞれのブランドについての来歴・味・香り・値段等について興味がある方は、インターネットで「キューバ産葉巻」と検索すれば数多くの検索結果がえられ、詳細な情報を知ることができる。

1) COHIBA (コイーバ) :

いわずと知れたキューバ産葉巻の最高峰。つまり世界のトップブランド。色も姿も香

りも素晴らしい。吸い口を口に含むと、何ともいえない良い味がする。1本で1時間以上楽しめるランセロ（長さ 192mmx 直径 15.08mm）と、喫煙タイム約 20 分程度のパナテラス（長さ 115mmx 直径 10.32mm）では、大きさも違うが味も違う。

同じ銘柄であってもサイズが違えば味も違う。サイズによってタバコ葉のブレンドを変え、味も変えてあるからだ。キューバに行く機会があり、葉巻愛好家に土産をかうとすればコイーバは最高の贈り物となろう。



2) ROMEO Y JULIETA (ロメオ・イ・フリエタ) ロミオとジュリエット :

1875 年創業。世界的に有名な銘柄で 30 以上の種類がある。葉巻好きで知られていたイギリスのチャーチル元首相の名を取った「Churchill」（長さ 178mmx 直径 18.65mm、喫煙タイム約 1 時間 45 分）があることは特に知られている。比較的手頃な価格帯のサイズも多く、また 1 本ずつがアルミチューブに入っているものもあり、高貴な感じで、葉巻を吸わない人にも土産として渡すのに適している。



3) MONTECRISTO (モンテクリスト) :

1935 年から発売されているこの銘柄は、アレクサンドル・デュマの小説「モンテクリスト伯」から名付けられている。主人公モンテクリスト伯は、無類の葉巻好きであった。

世界で最もファンが多いとも言われ、キューバ産葉巻輸出の約 25% はモンテクリストが占めている。「モンティーズ」というモンテクリスト愛好家を表す言葉もある。



当初は No.1~5 の 5 種類から始まり、その後 'A' とエスペシャルが追加され、更に新たな種類が追加されている。筆者は吸ったことが無いが、'A' は完成されたキューバ産葉巻の最高峰ともいわれている。日本では、以前¥6,000.- (1 本) で販売されていた。No.1 や 3 は以前キューバで吸われていたが 'A' は無い。高くて手が出ず、同時にビギナーが吸うには分不相応の高貴なシガーのため躊躇したことがあったと記憶している。

4) PARTAGAS (パルタガス)

1845 年から販売されている最古参の銘柄の一つ。創業者ドン・ハイメ・パルタガスか

ら名前を取っている。濃厚な味で知られ、種類も多く、最高級品もある。

キューバ産葉巻といえば「手巻き」が代名詞であり、実際殆どの葉巻は手巻きだが、



パルタガスは機械巻の手頃な価格帯も生産している。1本ずつセロファンで包装されているのでお土産として多くの人に渡すには丁度良い。もはや存在しないブランドや一旦市場から消えたが復活を果たしたブランドもある中で、160年以上の歴史を持つパルタガスは特筆すべき銘柄と言える。

5) H・UPMANN (アチェ・ウーマン)

1840年代に銀行家であったハーマン・アップマンが創業者だが、その後売却され、1935年にメネンデス・イ・ガルシア・カンパニーが工場を買い取り、H・UPMANNは復活した。マイルドな味わいで吸いやすい。キューバの取引先の葉巻好きな方にリクエストされて、当時のドルショップで何度か購入した思い出がある。

キューバとアメリカの元大統領ジョン・F・ケネディーとの関係は特別なものだが、JFKが大のキューバ産葉巻の愛好家で、その中でもお気に入りのがHアップマンだったことは知られている。真偽の程は定かではないが、1962年2月に対キューバ全面禁輸措置を実施する前に、当時JFKの報道官だったピエール・サリンジャーにHアップマンを1,000本程度調達するように頼んだとの逸話がある。



なお、この銘柄をキューバ人は、普通「アチェ・ウーマン」と発音していた。



と、私の好きな、5銘柄をあげさせていただいたが、やはり、プーロ・アバーノスの愛好家たちの多くも、だいたいこの5銘柄をあげているようである。では、世界的な有名ブランド、ダビドフについては？と聞かれるもかもしれない。筆者がもっているダビドフは、1988年まで製造されていたものである。では、今は？ダビドフの謎は、また次回に紹介したい。

筆者の手元にある葉巻リングの写真を掲載する。実際に吸った物もあれば、買った物も含まれている。四角い小さな封筒に何枚かのリングが入った状態でハバナの

ホテル内のドルショップで販売されていた。写真は約 20 年前に購入した物。(続く)